

特別支援学校教師の職務意識に関する研究Ⅱ

教師へのアンケート結果分析を通して

○南木正史

(栃木県芳賀青年の家)

KEY WORDS: 特別支援学校教師 コミットメント 職務満足

(目的)

これまで特別支援学校教師の仕事に対する意識を扱った研究として、任・安藤(2007)が肢体不自由養護学校教師の職務特性と職務満足感を明らかにしようとしたものがある。特別支援学校は、障害種別が異なると教育手法も異なることから、障害種の違いが特別支援学校教師の仕事に対する意識に何らかの影響を及ぼすことが考えられる。これは、小学校、中学校、高等学校などの他の学校種とは異なり、特別支援学校特有のものであろう。

本研究では、この点を踏まえながら特別支援学校教師の仕事に対する意識について検討を行う。特別支援学校教師の意識について性、年齢、勤続年数、学校種別において差がみられるか明らかにすることを目的とする。

(方法)

研究期間：研究期間 2015 年 1 月～2015 年 3 月

対象：22 歳から 59 歳の特別支援学校教師 185 名で内訳は、男性 68 名・女性 117 名、20 歳～29 歳 27 名・30 歳～39 歳 49 名・40 歳～49 歳 71 名・50 歳～59 歳 38 名であった。特別支援学校の障害種別では、視覚障害 4 名・聴覚障害 3 名・知的障害 77 名・肢体不自由 71 名・病弱 23 名・総合(含 知肢併設)7 名であった。勤続年数の平均は 16 年(最短 1 年、最長 39 年)であった。

手続き：特別支援教育の研修会において研修後、特別支援学校教師に質問紙を手渡し、回答を依頼した。回答は無記名で行われ、回答された質問紙はその場で回収した。属性以外の回答は、「当てはまらない(1点)」、「あまり当てはまらない(2点)」、「どちらともいえない(3点)」、「やや当てはまる(4点)」、「よく当てはまる(5点)」の 5 件法で求めた。回答者からは、調査開始時に文書と口頭で研究の趣旨を説明し了解を得た。

表 質問紙の構成

1. 属性
2. キャリアコミットメント尺度
3. 職務満足感尺度
4. 職務特性尺度 (5 領域：仕事の主体性、知識・技能の多様性、先輩・同僚からの意見や評価、仕事自体から得られる自己評価、保護者や他の専門職との連携)
5. 心理状態尺度 (3 領域：仕事に対する責任感、仕事に対する把握感、仕事に対する有意味感)

分析方法：キャリアコミットメント、職務満足感、職務特性(5 領域)、心理状態(3 領域)について t 検定を行うとともに内部整合性において α 係数を参考に評価し、性別、年齢別、勤続年数別、学校種別での平均値に差があるかについて検討を行った。

(結果)

1.性別にみた仕事に対する意識の比較：「職務満足感」は 1%水準で、「キャリアコミットメント」、「仕事に対する把握感」は 5%水準で有意差がみられた。いずれも男性が高かった。「職務特性」は、有意差はみられなかった。平均値は、「知識・技能の多様性」、「保護者や他の専門職との連携」で

女性が高く、他の 8 尺度は、男性が高かった。

2.年齢別にみた仕事に対する意識の比較：40 歳以上の教師と 40 歳未満の教師で仕事に対する意識を比較したところ「仕事に対する把握感」において 0.1%水準で有意差がみられ、「仕事の主体性」においては 5%水準で有意差がみられた。いずれも 40 歳以上の教師の方が 40 歳未満の教師よりも高かった。「キャリアコミットメント」、「職務満足感」については、有意差はみられなかった。

3.勤続年数別にみた仕事に対する意識の比較：「仕事に対する把握感」において 1%水準で有意差がみられ、「知識・技能の多様性」においては 5%水準で有意差がみられた。いずれも教職 16 年以上の教師の方が高かった。キャリアコミットメント、職務満足感において有意差はみられなかった。平均値は、「職務満足感」、「仕事の主体性」、「知識・技能の多様性」、「仕事自体から得られる自己評価」、「仕事に対する把握感」、「仕事に対する有意味感」において勤続 16 年以上の教師が高く、他は、16 年未満の教師が高かった。

4.学校種別にみた仕事に対する意識の比較：視覚障害・聴覚障害・病弱・総合(含 知肢併設)は、回答数が少なかったため除外し、知的障害特別支援学校教師と肢体不自由特別支援学校教師間で仕事に対する意識について検討を行った。「保護者や他の専門職との連携」、「仕事に対する把握感」において 5%水準で有意差がみられた。「保護者や他の専門職との連携」は、肢体不自由特別支援学校教師が高く、「仕事に対する把握感」は、知的障害特別支援学校教師が高かった。他の尺度において有意差はみられなかった。

(考察)

性差にみた尺度平均値は、「知識・技能の多様性」、「保護者や他の専門職との連携」で女性教師が高く、他の 8 尺度で男性が高かった。概ね女性より男性が高いと考える。

年齢別では、「仕事の主体性」と「仕事に対する把握感」において有意差がみられた。40 歳以上の教師が高いことから 40 歳以上の教師は自分の仕事を把握しながら主体的に職務を遂行することが可能と考えていることが明らかになった。

勤続年数別では、「知識・技能の多様性」、「仕事に対する把握感」において勤続 16 年以上の教師の方が高かった。ベテラン教師にとって仕事は、専門性を広く身に付けながらも見通しがもてるものと捉えていることが推察される。

学校種別では、「保護者や他の専門職との連携」の平均値が肢体不自由特別支援学校教師で高く、「仕事に対する把握感」は知的障害特別支援学校教師で高かった。これは、保護者、医者、作業療法士、言語聴覚士との連携が肢体不自由特別支援学校で日常的に行われていることを裏付けるものであろう。肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒にとって治療や健康維持といったものが不可欠である。「仕事に対する把握感」において知的障害特別支援学校教師が肢体不自由特別支援学校教師よりも平均値が高いという結果もこのような背景に起因するものと考えられる。その他 8 尺度得点においては有意差が認められなかった。これらのことから知的障害特別支援学校教師と肢体不自由特別支援学校教師の仕事に対する意識の違いは、限定的といえる。

(NANMOKU Masafumi)